研究 No. 1318

コミュニティの主体性が発揮される公共空間の生成プロセスの解明

ーコミュニティガーデン型の土地利用を対象としてー

主査　秋田　典子*1
委員　高村　学人*2，　宗野　隆俊*3

少子高齢化社会においては，公共施設等のインフラの維持・管理活動の担い手として住民自身が公共空間に積極的に関わることが求められている。本研究では，住民の主体的な維持・管理活動により公共的土地利用が行われているコミュニティガーデンを対象に，コミュニティが主体性を確保し，空間の公共性を担保するプロセスを4つの事例から分析した。この結果，コミュニティガーデンという場がコミュニティの主体性を醸成するツールになっていること，また空間の公共性はガーデンづくりという協働作業と運営主体の積極的な地域との関わりによって生み出されていることが明らかになった。一方で，コミュニティガーデンのような一種のテーマ型の活動は，活動のきっかけを行政が設定した場合に「区」などの比較的大きな規模のコミュニティが基盤となることから，活動エリアとコミュニティのエリアの整合性を取ることが難しいことが明らかになった。

キーワード：1)コミュニティガーデン，2)コミュニティ，3)維持コスト，4)浸水エリア，5)暫定的土地利用

THE GRNERATION PROCESS OF PUBLIC SPACE THAT THE AUTONOMY OF COMMUNITY IS APPEARED

ーAn Example About Community Garden Type Land Useー

Ch.　Noriko Akita
Mem. Gakkto Takamura,　Takatoshi Muneno

Community garden has the function which a community acquires autonomy and to secure the public responsibility of space. In this research, it was shown clearly from four examples that a "place" called community garden is brewing the autonomy of a community, and that relation by collaboration work and the positive area of a subject is improving the public responsibility of space.

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

現代社会の公共空間は，「作られたもの」注1)で溢れている。公園，道路，公共施設などはいずれも多くの住民にとって，「作られたもの」という存在である。しかし，今後の少子高齢化・人口減少社会においては，インフラの維持・管理に必要なコストをいかに抑えてゆくかが重要な命題となり，場合によっては身近なインフラを住民自身が協働で管理する必要が生じると考えられている。この前提となるのが，公共空間を構成する要素が「作られたもの」であるという受動的な認識から，「作るもの」「自ら積極的に管理に関わるもの」であるという能動的な認識への転換である。

公共空間に対する「作られたもの」という認識は，インフラの維持コストを増大させる側面も有する。公園を例にとってみよう。公園内の植栽の落ち葉が周辺に飛散する，ゴミが散乱している，ボール遊びをしている等の些細なことであっても，そこが「作られたもの」であり，周辺住民が自分自身で能動的に関わる空間だと認識しない限り，これらは行政に対するクレームとなる可能性を持つ。クレームの連絡が行政に入ると，担当者は通常業務よりもクレームへの対応を優先せざるを得ず，行政もインフラの管理に能動的，計画的に関わることが難しくなる。東京郊外のある自治体に対するヒアリングによると，現在の市内の街区公園数は約 700 箇所にのぼり，全ての公園を行政が管理することは現実的に不可能であるため，実際の運用ではクレームがあった公園に対してのみ担当者が対応しているとのことだった注2)。この結果，担当課で全ての公園を管理しきれないだけでなく，課内で誰も行ったことがない公園も多数あるという。

クレーム対応が本来の業務を圧迫している状況は，公園の適切なマネジメントという観点からも当然に望ましいとは言えない。現時点でも，行政のみによる公園の管理という前提は，既に破たんしていると言えよう。この

*1 千葉大学大学院園芸学研究科 准教授
*2 立命館大学政策科学部　准教授
*3 滋賀大学経済学部　准教授

ような状況において，将来的に人口減少に伴い税収やマンパワーが今以上に減り，公園管理のための予算が圧縮されると，一層クレームが増加するという悪循環に陥りかねない。これは何も公園に限ったことではなく，公共的な空間全体に共通する近年の傾向だとも言える。行政に代わり身近な空間の管理をコミュニティに求めようとする場合，住民の空間に対する消極性は，生活の質を維持してゆくうえで深刻な課題となりかねない。

これに対し，本稿で対象とするコミュニティガーデン（以下，CGという）は，「作られたもの」を「作るもの」に取り戻すための活動・手段の１つとして位置づけられる。CGは，住民が協働で身近な空間を緑や花で彩られたガーデンに変え，それを継続的に維持，管理し，近隣住民に開かれた「みんなの庭」として運営する活動であり，まさに住民が能動的に空間に関わる公共的行為である。

そこで本研究では，CGの場や活動を通じて近隣住民やコミュニティがどのように主体性や空間の公共性を獲得してゆくのか，また，CGという場がコミュニティの醸成や主体形成の機会をどのように提供しうるかについて明らかにすることを目的とする。

1-2. 研究の対象と方法

わが国では現在のところ，CGやその運営主体の支援を直接的に目的とする制度や仕組みは殆どない。このためCG活動は，コミュニティ支援等の目的が類似する事業や制度を活用して行われることが多い。千葉県柏市が2012年に市内の遊休地・空閑地の緑化活動を直接支援する制度として「カシニワ制度」を導入しており，渡部ら(2014)による参与調査も行われているが[1]，運用開始から十分な時間が経過しておらず，制度に対する現時点での評価は難しい。

また，全国レベルでCGがどの程度存在するのかといったCGの全体像も把握されていない[注3]。行政が把握しているCGも，行政の助成制度等を活用している事例に限定されている。CGは制度面での支援が確立されていないため，短期間で活動が終了するものも少なくない。こうした側面が尚更CGの全体像の把握を困難にしている。そこで本研究では，網羅的にCGを抽出するのではなく，住民主体で形成されたCGの中から[注4]，筆者の関わりのある以下の4つのCGを分析の対象として取り上げた。

まず，関東圏で最初のCGとして国の支援を受けて開設された①神奈川川崎市の「宮崎コミュニティガーデン」，次に，宮崎コミュニティガーデンに触発され区の支援のもとで開設された②神奈川県横浜市「今宿コミュニティガーデン」，大学が運営に関わっている③千葉県松戸市の「戸定みんなの庭」，最後に，被災地において地権者を中心に新たに活動が始まった④宮城県石巻市の「雄勝ローズファクトリーガーデン」の4つの事例である。①②はヒアリングにより，③④は筆者自身の参与観察により調査を行った。

1-3. 分析の視点

本研究では，「作られるもの」から「作るものへ」をキーワードとして，CGを通じたコミュニティの主体性の獲得，公共的空間の生成，CGの場や活動が有するコミュニティ醸成機能を明らかにすることを目的としている。

そこで，本研究の分析の視点として，１）CGを契機としたコミュニティの主体性の獲得のプロセス，２）CG運用主体による空間の公共性の獲得，３）CGの場を通じたコミュニティの醸成機能，という3つを分析の視点として設定し，各事例を評価することとする。

2. コミュニティガーデンの定義

コミュニティガーデンの活動は，1970年代前半の米国で，荒廃した住宅地の環境改善を目的として始まったとされている[2]。CGは，近隣住民が空き家や空き地となった敷地を耕して緑溢れる空間に変化させることで，ハード面のコミュニティの住環境を改善すると同時に，ソフト面でも住民同士の繋がりをつくり，コミュニティを醸成する手段として位置づけられている。

越川(2002)はCGの定義について，①様々な人々が庭として共有できる緑地空間，②地域社会への参加のきっかけづくりの場，③地球環境や地域問題について学び体験できる生きた社会教育の場，④地域の庭づくりから始まる緑のまちづくり活動，⑤コミュニティ再生のための市民の草の根運動の5つを示している[3]。

一方，土地利用の観点からは，CGが暫定的土地利用として有効な手段であることが指摘できる。例えば米国のニューヨーク市の場合，CGに使用されている土地は住宅局が土地所有者から買収したものが多く，それ以外にLand Trustのような中間団体が所有しているものもあるが，いずれにせよ個人の土地ではなく，公共等が所有する遊休地の暫定的利用という側面が強い[4]。日本のCGも同様に，自治体が所有する使途が定まっていない遊休地の暫定的利用が多い。遊休地として土地を放置しておくことによる外部不経済を，CG活動が緩和する効果があるからだと言える。

米国のCGの中には，個人用の耕作区画を敷地内に含むものも多くあり，外見的には日本の市民農園とほぼ同じものもある[注5]。ただし，米国のCGは市民農園のような形態であっても運営しているのが住民団体であり，日本の市民農園のように行政や農家が運営しているものではない[注6]。

日本では，1990年代後半からCG活動やCGを取り入れようとする取り組みが見られるようになるが[注7]，既に日本には市民農園の制度があったこともあり，CGは個人による区画耕作ではなく，複数の住民による協働作業の空間として独自に発展してきた経緯がある[5]。

以上のわが国におけるCGの位置づけを踏まえ，本研究で取り上げる4つの事例を見ていくこととする。

3. ケーススタディ

3-1. 宮崎CG

1) 位置及び周辺環境

宮崎CGは，2001年に神奈川県川崎市宮前区宮崎3丁目に開設された敷地面積約700㎡のCGである。宮崎CGの運営主体は「宮崎CG実行委員会」（以下，実行委員会）である。

宮崎CGは，市街化区域内の第1種低層住居専用地域にあり，都市計画道路予定地の暫定的土地利用としてCG活動が行われている。図3-1を見ると，宮崎CGの敷地の南側まで道路が整備されているのが分かる。敷地の西側は企業の研究所の跡地開発として，宮崎CGの開設より後の2006年に238区画の戸建住宅が建設された。

図3-1. 宮崎CGの周辺環境

2) CG成立の経緯

①宮前ガーデニング倶楽部の設立

表3-1に宮崎CGの活動経緯を示す。1997年に川崎市宮前区は，市民提案型のマスタープラン策定の試みとして「区づくりプラン」の策定を行った。この際，住民から「ガーデン区構想」が提案され，「ガーデン区構想」を実現するために，区づくりプラン推進委員，宮前区美化推進委員，ガーデニングを趣味とする3人の女性が中心になり知人に呼びかけ，集まった8人により1999年に「宮前ガーデニング倶楽部」（以下，ガーデニング倶楽部）が結成された。

ガーデニング倶楽部に対するヒアリングによると，ガーデニング倶楽部の設立当時，宮前区の花壇はあまり手入れがされておらず，ゴミや吸い殻が花壇内に散乱している状態だった。宮前区の美化推進委員であったガーデニング倶楽部のメンバーの１人は，このような状況を改善したいと考えて区に働きかけ，美化活動の一環としてポケットパークの管理活動を始める。ポケットパークに花苗を植える際，区内の公園管理事務所から提供された花苗のみでは不十分だと考えたガーデニング倶楽部のメンバー8人は，各自が1000円ずつ資金を出し合い，地元の花苗生産農家から追加の花苗を購入した。こうした経緯により，ガーデニング倶楽部は会費が年間1000円の会員制の団体となる。

現在，ガーデニング倶楽部は宮崎CGだけでなく，宮前区全域を対象に花壇の整備活動を行っている。2013年時点のガーデニング倶楽部の会員数は約35名であり，主要な構成メンバーは50代から70代の女性である。

②宮前区まちづくり協議会による支援

宮前区は，前述の区づくりプランの実現性を担保するために，区づくりプランが策定された1997年に中間支援組織として「宮前区まちづくり協議会」（以下，まちづくり協議会）を設立した。

まちづくり協議会は，市民による主体的なまちづくり活動を生み出す支援として5万円を2年間，活動を育てる支援として15万円を3年間，活動を継続させる支援として15万円を2年間という助成制度を設けている。市民は自主的なまちづくり活動のために最大で7年間，合計85万円の助成金を受け取ることが可能であり，2011年からはまちづくり協議会が花苗の提供も行うようになった。いずれもガーデニング倶楽部は支援の対象となり，ガーデニング倶楽部の活動はまちづくり協議会の支援制度により活動の基盤が形成され，安定的に活動が維持されてきた。

③建設省によるモデル事業の実施

ガーデニング倶楽部が設立された2000年頃は，米国発祥のCGの仕組みを本格的に日本に導入しようという動きや期待があった[注6]。

2001年に当時の建設省（現国土交通省）は，公園・緑化技術五箇年計画の第二次計画において，技術研究項目の1つとして「公園・緑地の整備・運営・管理および緑化推進のための市民，NPO，企業との協働技術」を定め，これに基づき「都市緑化による地域コミュニティの再生に関する調査」としてCGパイロット事業を設定している。ガーデニング倶楽部はこのパイロット事業の対象として選定された唯一の団体である。したがって，宮前区で宮崎CGの開設のために開催された9回のワークショップのうち，前半部分にあたる2001年1月から3月に実施された4回のワークショップは建設省のモデル事業として実施され，後半の5回のワークショップは宮前区の事業として実施された。

3) CGの空間形態

図3-2に宮崎CGの平面図を示す。宮崎CGは北東に向かって傾斜のある斜面地にあるため，南西から北東に向かう細長い敷地を階段状に区切り，段々畑のように植栽エリアを設けている。エリア別に植栽する植物の種類やテーマを変える等の工夫がされており，バラエティー豊かな空間が創出されている。また，内部で作業もできる大きな用具庫，話し合いやイベントに利用できるオープンスペースもあり，コンパクトな中に多様な機能が詰まった空間構成となっている。敷地の周囲は，当該敷地が遊休地であった時点からフェンスで囲まれたままとなっており，フェンスの入口には鍵がかかっている。このため近隣住民が日常的にCGに入ることはできない。

表3-1. 宮崎CGの活動経緯

時期	内容
1997年	宮前区区づくりプラン策定，宮前区まちづくり協議会設立
1999年	宮前ガーデニング倶楽部設立
2000年	宮前ガーデニング倶楽部が国土交通省によるCGパイロット事業の実施団体に選出
2001年 1月	「コミュニティガーデン実行委員会」を設立 第１回まちづくりワークショップ（モデル事業） 「私たちのまちの夢のコミュニティガーデンを語ろう」『コミュニティガーデンを作ろう』著者の越川秀治氏の講演会を実施
2月	第2回まちづくりワークショップ（モデル事業） 「ガーデンの場所を見つけに出かけよう」 第3回まちづくりワークショップ（モデル事業） 「どこに、どんなガーデンをつくろうか」
3月	第４回まちづくりワークショップ（モデル事業） 「CG実現に向けての基礎固め」：宮崎CG実行委員会が宮前区を通して宮前土木事務所に土地の使用許可申請を行う
4月	第5回まちづくりワークショップ 「ガーデン予定地の環境を調査しよう」
5月	第6回まちづくりワークショップ 「デザインの基本プランを考えよう」
6月	第7回まちづくりワークショップ 「いよいよ実施プランを考えよう」：宮前区土木事務所から土地使用許可を得る。草刈と花植え（CGモデル事業費で苗購入） 第8回まちづくりワークショップ 「さあ、作業で汗をかこう」：敷地内のガラの掘り起し、花壇スペースの確保
11月	花植えイベントの実施
2002年	近隣小学校の総合学習の場となる
2008年	宮崎CG実行委員会が直接，宮前区と土地の使用契約を交わす（管理が土木事務所から区へ変更）
2012年	隣接地の開発に伴い建設された提供公園の水道使用許可を得る
2013年	太陽光温水器の作製

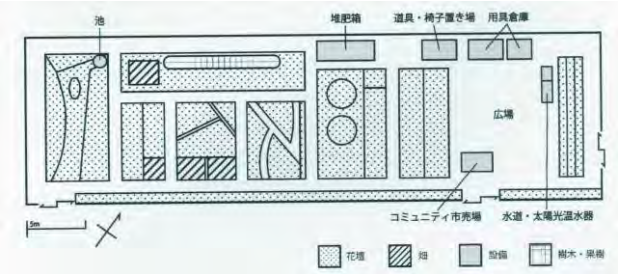

図3-2. 宮崎CGの土地利用状況

4) CGの運営

現在，宮崎CGは実行委員会が運営主体として活動を行っている。実行委員会は会費制ではなく，会員は宮崎CGの定期的活動に参加する約25名を指し，活動に参加する子どももその中に含まれている。子どもは宮崎CGで開催されるイベントをスタッフとして手伝っており，主体的に活動に参加している。活動は2週間に１回である。

表3-2は宮崎CGの年間予算額，表3-3は年間支出額である。これは宮崎CGのメンバーに対するヒアリングにより把握した数値であるため厳密なものではないが，CG活動の収支の目安となる。予算の中にガーデニング倶楽部の会費が入っているが，これは全て宮崎CGに使用しているわけではなく，宮崎CGの運営に必要な予算が不足した場合に，ガーデニング倶楽部の予算から補填しているということだった。

宮崎CGの活動予算を見ると，収入のうち最も金額が大きいのがイベント収益である。宮崎CGにおけるイベント収益は，宮崎CG内のオープンスペースで日曜日に開催している朝市や，そこで販売している会員の手作り小物による収益であり，イベントはCGの自立に欠かせない活動だと言える。助成金の収入もイベント収益の次に大きな収入源となっており，CG活動の持続に助成金が重要な役割を担っていることがわかる。支出を見ると宮崎CGの運営には年間約13万円が必要であり，そのうち半分をイベント収入等の自前で，残りの半分を助成金から調達している状況であった。

なお，宮崎CGは，通常の活動助成金以外に活動初期の2002年に用具整備費として47万円が建設省から助成されている。この用具整備費により，宮前CGは用具庫や打合せスペース，机，イス等の確保が可能になり，敷地面積が比較的広いこともあり，多様な敷地利用が展開できている。

表3-2. 宮崎CG年間概算予算（収入）

区分	概要	予算
会費	宮前ガーデニング倶楽部個人会費	35,000
	宮前ガーデニング倶楽部法人会費	5,000
事業収入	イベント収益	90,000
助成金	川崎市公園緑地協会	70,000
講演料	講演・指導等	7,000
予算合計		207,000

表3-3. 宮崎CG年間概算支出

区分	内訳	金額
イベント	材料費等	10,000
花壇 整備費	花壇整備費（会費より） 花壇整備費用（助成金より）	35,000 70,000
	その他	10,000
支出合計		125,000

5) CG活動を通じた主体形成及び公共性獲得の分析

①CG活動を通じたコミュニティの主体性の獲得

宮崎CGの運営主体の形成のプロセスは，母体となるガーデニング倶楽部の成立，実質的に宮崎CGの活動に関わる実行委員会の成立の2段階に分けられる。

ガーデニング倶楽部の活動の契機は市民参加型の区づくりプランの策定と市民提案による「ガーデン区構想」であり，区の政策に直接関わったことがコミュニティの主体性獲得の背景にあったと言える。

図3-4は，2001年1月にCGのモデル事業として実施した宮崎CGの第1回目のワークショップの広報のチラシである。チラシのタイトルは「まちづくり広場／市民・まちづくりワークショップ」であり，「まちづくり」の一環としてコミュニティガーデンが位置づけられていることがわかる。

これは，活動の契機となったのが区づくりプランの策定であることが影響していると考えられる。ワークショップを支援していたのは宮前区であり，想定される参加者の範囲も自治会や町内会より広い宮前区である。

一方，ワークショップの主催主体は，「コミュニティガーデン実行委員会」「宮前ガーデニング倶楽部」「田園都市線沿線地区の将来を考える会・区づくりプラン推進委員会」の3団体である。このうちコミュニティガーデン実行委員会は，ワークショップを通じて新たにCGの担い手となる任意の住民団体として想定されていた。

現在の実行委員会は，ガーデニング倶楽部を基盤とした実際に宮崎CGで汗をかく活動主体の総称であり，活動を通じて形成されていったメンバー制を取らない組織である。宮崎CGの植栽や土地利用の方針等に関する意思決定も，CG内に整備された打合せ用のスペース等で作業後の懇親を兼ねて協議したうえで決定されており，宮崎CGという場そのものが主体の形成基盤となっていた。

まちづくり広場
市民・まちづくりワークショップ

みんなでつくるコミュニティガーデン
コミュニティガーデン実行委員会
宮前ガーデニング倶楽部
田園都市線沿線地区の将来を考える会
区づくりプラン推進委員会

こどもも おとなも みんなみんな集まろう
みんなでつくろうコミュニティガーデン

私たちのまちの
夢のコミュニティガーデンを語ろう

日　時　2001年1月20日（土）
午後2時から4時30分
場　所　宮前区役所4階会議室

●コミュニティガーデンってなんだろう？
アメリカの事例紹介、イメージづくりを
畑川秀治さん（コミュニティガーデン研究会）
から聞きましょう
●私たちのまちの夢の
コミュニティガーデンってどんなガーデンで
どう使おうか、どうつくろうか、
どんなガーデンが良いのだろう
夢話をみんなで考え話し合って
夢のコミュニティガーデン像を描きましょう

今後のまちづくり広場開催予定 シリーズ全9回
1. ガーデンの場所をみつけに出かけよう　2月18日（日）
2. どこに、どんなガーデンをつくろうか　2月24日（土）
3. ガーデン実現へむけての基礎固め　3月17日（土）
4. ガーデン予定地の環境を調査しよう　4月
5. デザイン、基本プランをつくろう　5月
6. いよいよ実施プランを考えよう　3月
7. さあ、作業で汗をかこう　6月
8. 完成までもうひと息、ひと汗　6月
9. 夢のコミュニティガーデンモデル完成！！

宮前ガーデニング倶楽部は、財団法人・緑市緑化基金を後ろに、建設者が提唱している「コミュニティガーデン研究会」のモデル事業実施団体に選ばれました。全国後期に先駆けて、地域の住民が「自分たちでつくり、自分たちで使う」コミュニティガーデンのあり方を検討します。
宮前ガーデニング倶楽部が、3つの区町・田園都市線沿線を思いっぱいのまちにする・市民のコミュニティを築げる・市民と企業、行政の協力関係を深めるを実践、活動していることが認められたものです。
「私たちのまちの夢のコミュニティガーデンづくり」をごいっしょしませんか、地域みんなでつくりましょう。

もう一つの企画
宮前ガーデニング倶楽部のガーデンめぐり
日　時　2001年1月20日（土）
午前9時30分から12時30分
場　所　宮崎台駅前花壇集合

ぜひご参加ください
●いづれか一方の参加も可能です
お問い合わせは　☎044-877-6608　石川和子
☎044-856-3125　区政推進課まで

図3-3. 宮崎CG第1会ワークショップチラシ

図3-4. 宮崎CGを南側から見下ろす

図3-5. 宮崎CG内のオープンスペース

②CG空間の公共性

宮崎CGの活動では，2週間に1度の活動日にフェンスのドアを開け，毎週，敷地内で朝市も開催している。そこで地元の農家の生産物と併せ，宮崎CG実行委員会の関係者の手作り小物等も販売しており，朝市に買い物に来る近隣住民は，生産農家や実行委員会のメンバーとの会話を楽しみ，宮崎CGをパブリックスペースとして利用している。宮崎CGという場があることで，イベントや朝市を通じて近隣の住民同士や農家と住民が繋がるきっかけにもなっている。

③CGの場が持つコミュニティの醸成機能

宮崎CGは，ガーデニング倶楽部にとっては宮前区内の花壇整備活動の１つであり，実行委員会への参加も班活動のような位置付となっている。一方，実行委員会にはガーデニング倶楽部の会員だけでなく，隣接する小学校に通う児童や，近隣に住む定年退職後の男性など，宮崎CGという場を活動基盤とするメンバーも存在している。つまり，宮崎CGの運営主体は，テーマ型の市民団体であるガーデニング倶楽部を軸としながらも，これに限定されない場を軸とした主体を巻き込んでおり，CGという場はテーマ型と地縁型のハイブリッドなコミュニティの主体を形成する契機となっていた。

3-2. 今宿CG

1）位置および周辺環境

今宿CGは2005年に神奈川県横浜市旭区今宿2丁目に開設された約600㎡のCGである。今宿CGの運営主体は「今宿コミュニティガーデン友の会」（以下、友の会）である。

敷地は市街化区域内の第一種低層住居専用地域に位置している。明確な用途はなく，周囲の戸建て住宅団地の開発時に事業者が残土置き場にしていた開発残地であり，開発後に横浜市に寄付された所謂「へた地」である。長期に渡り閉鎖管理されており，雑草が繁茂した荒地となっていた。周辺は一戸建ての住宅地であるが，CGの敷地周辺には，南北に縦長に緑地が伸び，CGの東側には駐車場，西側には高圧の鉄塔がある。

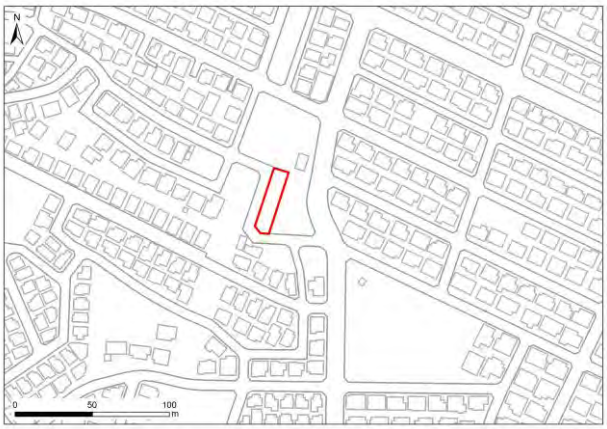

図3-6. 今宿CGの周辺環境

2) 設立の経緯

今宿CGの活動の経緯を表3-4に示す。今宿CGは宮崎CGのように，活動の母体となるテーマ型の住民組織が存在していた訳ではないが，区レベルのまちづくりの計画策定が契機となっている点は同様である。

旭区では，2002年に横浜市都市計画マスタープランの旭区版の策定を市民参加で実施し，これを受けてマスタープランの実現を目的とする「旭区まちづくりクラブ」が発足する。その後，2004年に旭区がまちづくりの検討・実践を目的として主催した「まちづくりサロン」にて，当該敷地を含む旭区内の4ヶ所の遊休地の活用方法が検討され，現在の今宿CGの土地をCGとして活用しようという提案がなされた。CGというアイデアは区が住民に提供したものであり，まちづくりサロンに参加した住民はモデル事業として既に活動が始まっていた宮崎CGの視察を行っている。

今宿CGでも宮崎CGと同様に，地区別版のマスタープランの策定を契機に，区レベルのまちづくりの活動に対する機運が高まりCGの活動に繋がっている。また，宮崎CGの実践が今宿CGの設立を促したと言える。

表3-4. 今宿CGの開設の経緯

時期	内容
2002年	都市計画マスタープランの旭区版の策定を受け，マスタープランの実現を目的として「旭区まちづくりクラブ」が発足
2004年	「まちづくりクラブ」による「まちづくりサロン」が開始，旭区内の4ヶ所の遊休地の活用方法を検討。 まちづくりクラブのメンバーに対し，区の職員がまちづくりの手段としてCGがあることをアドバイスし，CGの勉強をはじめる。旭区長にCGについて提案し受理される。
2005年	検討メンバーによるCG活動の準備開始。区報により管理運営委員を公募。検討メンバー、公募委員による会合。役員、規約等を決定し、今宿CGの運営委員である「今宿コミュニティガーデン友の会」を発足。賛助会員として6社が加わる
2006年	賛助会員として3社が加わる
2007年	賛助会員として1社が加わる 学童保育との連携開始（現在は中止）
2010年	障がい者支援団体との連携開始
2012年	近隣保育園との連携開始

3) 空間形態

今宿CGも宮崎CGと同様に傾斜地に位置している。これは遊休化している土地が利用しづらく，他に利用方法がないのでCGとして利用が許可されているからだと考えられる。

今宿CGは，宮崎CGと異なり短辺部分が傾斜しているため，CGは次3-7に示すように長方形の敷地を大きく3つの正方形のゾーンに区分して使用している。3つのゾーンのうち南側が芝生広場，中央が野菜等を栽培する畑地，北側が連携団体に貸し出すスペースである。不整形な北側は用具倉庫と樹木エリアになっている。この土地利用の形態は今宿CGの開設当初から10年以上，殆ど変更されていない。

また，今宿CGも，遊休地であった時点から周囲にフェンスがあったため，日常的に住民がCGの空間を使用することはできない。ただし，入口の鍵の暗証番号を周囲に伝えることで実質的には比較的自由な出入が可能になっている。

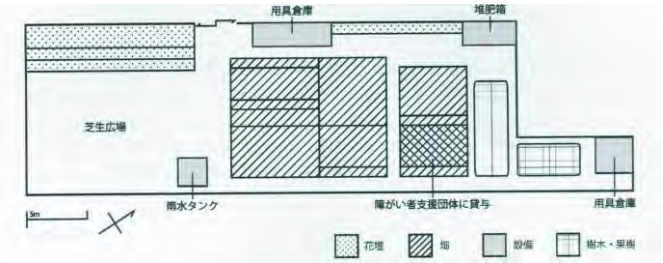

図3-7. 今宿CG平面図

図3-8. 北側から見た今宿CG

図3-9. 今宿CGの入口に掲示された賛助会員の看板

4)CGの運営

今宿CGは，CGにおける実質的な活動主体である「今宿CG友の会」（以下，友の会という）のメンバーから，会費を徴収している。会費は宮前ガーデニング倶楽部と同様に年間1000円である。今宿CGの特徴は，個人会員に加えて近隣の地元企業に賛助会員としてガーデン活動に対する寄付金を募り，これを活動原資としている点である。賛助会員の勧誘は，友の会のメンバーの個人的な繋がりを通じて行われている。賛助会員となると，図3-9のようにガーデンの入口に企業の名前が掲示される。

2013年時点で友の会の個人会員は45名，賛助会員は11社ある。活動は2週間に1回で，CG活動の実働メンバーは10名程度の個人会員で，それ以外の会員は活動のサポーターとして位置づけられている。また，今宿CGは「エコ笑コ祭」，「サマーフェスタ」，「収穫祭」等のイベントを頻繁に開催しており，イベントを通じて積極的にCGの場を近隣住民に開かれたものにしようと取り組んでいる。

表3-5に今宿CGの年間収入の概要，表3-6に年間支出の概要を示す。宮崎CGと同様に，ヒアリングにより年間の収入および支出の額を確認しているため，収支のバランスが取れておらず厳密な金額ではないが，おおよその目安として参考になる。今宿CGの年間予算及び支出は約18万円と宮崎CGとほぼ同様である。また，イベント収入が活動資金の基盤となっている点も宮崎CGと同様である。ただし，宮崎CGの活動資金の基盤の１つが助成金であるのに対し，今宿CGは協賛会費が活動の基盤となっている点が異なっており，また特徴でもある。

表3-5. 今宿CGの年間収入概要

区分	内容	収入
会費	個人会費	39,000
	賛助会費	75,000
事業収入	エコ笑コ祭・サマーフェスタ・収穫祭等	63,000
合計		177,000

表3-6. 今宿CGの年間支出概要

区分		金額
イベント支出		42,000
花壇整備費	用具・花苗・肥料・材木等	91,000
印刷・通信費		48,000
合計		181,000

5)CGを通じた主体性獲得及び公共性形成の分析

①CGを通じたコミュニティの主体性の獲得

友の会の結成のきっかけは，宮崎CGと同様に区レベルのまちづくり活動の区による支援であった。したがって，対象となるコミュニティの範囲も宮崎CGと同様に，区レベルの住民であり，区の遊休地の１つが区のまちづくりに関心のある住民が活動する場の1つとして選定されたと言える。友の会はCGがなければ主体として組織されなかったことから，区によるまちづくり活動の支援により，まちづくりに関心のある住民の主体性が，CGという場を通じて獲得された。ただし，友の会の設立メンバーは，それぞれ既に区内で環境サークルや老人クラブ等，別のテーマの活動基盤を持っている。したがって，今宿CGは，区レベルでコミュニティを牽引する住民が多様な活動を展開する場の１つとして運営されているとも言える。

しかし，課題もある。今宿CGが横浜市の助成事業に応募した際に，近隣住民から反対の署名が提出され，事業提案を取り下げるという事態に発展した経緯があった。これは，CGは区というスケールで見ると非常に小さな空間であり，特に空間が閉鎖管理されている場合，近隣住民にとってCGは，「知らない人」が時々使用している「自分に関係のない空間」となる可能性が高いからである。

友の会のメンバーは，ほぼ設立当初に組織されたメンバーのままであるため，CGの開設から約10年が経過した現在，当時は60代だった住民も70代になり高齢化が進んでいる。メンバーの公募はしていないため，仲間うちの活動に留まりやすいという課題もある。

②CG空間の公共性

宮崎CGと同様に，今宿CGも周囲がフェンスで囲まれており，入口には鍵がかかっているため日常的に近隣住民の使用は不可能である。ただし，今宿CGは敷地内に近隣の学童保育や障がい者施設のための専用空間を設けるなど，近隣の主体と積極的に関わる取り組みを継続している。

また，CG内でイベントを年に3回程度開催し，近隣の住民や子どもたちがCGを利用する機会を積極的に設けている。今宿CGのイベントには，ガーデン内に入りきれないほどの来訪者もあり，近隣住民が顔を合わせる場を提供している。今宿CGは，CGを住民に開かれた空間にする手段として，普段のガーデン管理活動よりもイベントを重視している点が特徴として指摘できる。

③CGの場が持つコミュニティの醸成機能

今宿CGで開催されるイベントは，友の会のメンバーの所属しているテーマ型の活動がバックグラウンドとなり展開されている。例えば，環境配慮型の料理やリサイクル小物づくり等である。つまり区内のテーマ型活動を市民に広く発信，啓発する場として今宿CGが活用されている。今宿CGは区レベルの個々のテーマ型の組織を母体とする，テーマ統合型の活動の場だと言える。

まちづくりに関心のある住民が，同じテーマに関心を持つ仲間を集め団体を組織するためには，一定の人口が必要であるため，身近なコミュニティとして区レベルのコミュニティが対象になる。一方で，CGが場として影響を持ち得る空間は近隣コミュニティのみである。このため，今宿CGはイベントに重点を置くことで，普段の活動への参加を想定する住民の範囲よりも広い範囲の人を，イベントを通じて呼びこもうとしているとも考えられる。

今宿CGからは，コミュニティの主体形成において，対象とコミュニティの規模と活動空間の整合性をいかに確保するかが課題の1つになることが示唆された。

3-3. 戸定みんなの庭

1）位置及び周辺環境

戸定みんなの庭（以下，戸定CGという）は，2007年に松戸市松戸に開設された約200㎡のCGである。千葉大学園芸学部の近隣に位置する第一種低層住居専用地域であり，運営主体は「戸定みんなの庭の会」（以下，庭の会という）である。実質的には千葉大学の学生が中心的に活動を展開している。

2) 活動の経緯

千葉大学松戸キャンパスでは，環境マネジメントシステム（ISO14001）（以下，環境ISOという）を主体的に運用する学生組織（以下，学生委員会という）が2005年に発足した。学生委員会は，環境ISOの方針である「地域社会に開かれた形での環境マネジメントシステム」を実現するものとして，2006年11月に近隣住民の参加を募り，近隣の緑化活動を見てあるく「歩こう会」を実施した。この際，近隣住民が積極的に緑化活動をしていること，一方で使用されず雑草が繁茂しゴミが捨てられている敷地があることを発見する。これを大学側はCGにしようと提案し，松戸市役所と交渉して土地の賃借契約を大学と市役所で結び，2007年よりCGの活動が始まった。

ただし，戸定CGは，活動開始直後に近隣の一部の住民からCG活動に対する反対の声が上がり，活動は必ずしも順調に進まなかった。近隣住民から野菜の栽培等に対しても反対意見が出され，市役所が仲介し活動内容を近隣住民の許容の範囲内に限定することとした。この結果，地域でCGを運営する主体を形成しようとする段階で，コミュニティの内部に課題を抱えることとなった。

しかし，2009年6月には活動実績が認められて庭の会が松戸市の緑化愛護団体に登録され，松戸市が所有する苗圃から無償で花苗の提供を受けられるようになる。また，2009年度，2010年度には大学側が学内予算から10万円をCGの整備費として別途獲得し，通常予算の5万円に加えて年間15万円程度をCG整備予算として利用できるようになった。この時期に戸定CGの空間面での整備が集中的に進められ，現在の戸定CGの空間基盤が形成された。

3) 空間形態

図3-11に戸定みんなの庭の平面図を示す。約300㎡ある敷地のうち，前面道路沿いの200㎡程度をCGとして使用しており，敷地南側の約100㎡は今のところ使用していない。敷地内には宮崎CGや今宿CGと同様に傾斜があるため，一定のレベルごとに土留めを設け，3層の花壇としている。

また，戸定CGは宮崎・今宿CGと異なり，CGの周囲に柵がない。これは，従前よりフェンスがなかったためである。したがって，いつでも誰でも自由にCGに出入が可能である。

図3-10. 戸定CGの周辺環境

表3-7. 戸定CGの経緯

時期	内容
2004	千葉大学にて環境ISOの活動開始
2006年3月	千葉大学が環境ISOの認証取得
2006年11月	学生と近隣住民による「歩こう会」開催。CGとなる敷地を発見。大学が市役所と土地の利用に関する交渉を実施。
2007年6月	CGワークショップの実施
2007年8月	CGとしての活動を開始 近隣住民の活動反対により活動休止
2007年11月	活動再開
2009年5月	市役所と反対住民との話し合い
2009年6月	緑化愛護団体登録，花いっぱい運動推進協定の締結
2009年8月	看板の設置
2011年3月	東日本大震災発生
2011年12月	松戸市が放射線量重点調査地域に指定

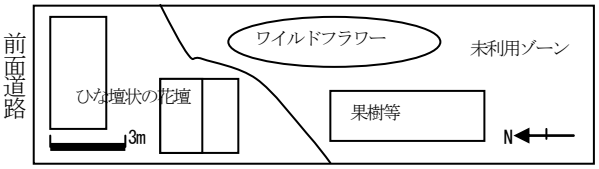

図3-11. 戸定CG平面図

図3-12. 戸定CGの様子

4) CGの運営

戸定CGの活動資金は，前述のとおり基本的に大学が負担している。月１回の活動を定期的に実施している時点では，年間約15万円を活動に利用していた。また，庭の会に会員等の明確な位置づけはなく，学生が毎月企画する活動に，地元の自治会や子ども会が参加する形になっている。活動人数は運営が安定し始めた2010年頃になると，大学側約10名，住民約5名，子ども約5名の合計で20名程度となった。

しかし，2011年3月の東日本大震災に伴う原子力発電所の事故により、2011年12月に千葉県松戸市は環境省により「放射線量調査重点地域」に指定され，活発な活動が困難になった。これまでのCG活動に子どもも参加していたことから，2011年4月以降は安全性等に配慮してCG内の線量を計測し，線量の低いエリアの活動に限定したうえで，ガーデンでの活動時間を少なくし，押し花しおりやハーブ石鹸づくりなど，室内や大学内での活動時間を増やす工夫をしている。この結果，場所を提供する立場である大学側が一層CG活動におけるイニシアチブを持つこととなった。

５）CGにおける主体形成及び公共性の獲得の分析

①CGを通じたコミュニティの主体性の獲得

庭の会には意思決定の仕組みが明確に存在せず，活動内容の提案や花苗等の購入は学生側が主体となって行っており，活動に関わる特に重要な意思決定は，学生グループと教員，自治会長で必要に応じて行われている。このため，地域住民や子どもはあくまで参加する側の立場に留まり、主体的な参加に至っていない。大学生も毎年入れ替わるため，構成メンバーは安定していない。

一方で，地元の自治会長がCG活動に積極的に参加していることから，大学と自治会との繋がりができ，地域の祭りに大学生が参加し盛り上げるなど，両者の交流を発展させる機会になっている。自治会長にとってCG活動への参加は地元の大学への貢献であり，CGは大学と地域を繋ぐ場だと認識されている。現時点で庭の会はコミュニティとしての主体性を持っているとは言い難く，地元の大学貢献，大学の地域貢献という側面が大きい。

②空間の公共性

宮崎CG，今宿CGと異なり，戸定CGには敷地の周囲にフェンス等が設けられていないため，誰でも自由に入ることが可能である。しかし，住宅地の行き止まりに敷地があり，大学生の通学ルートからもずれているため，日常的にその場所を利用する人は少ない。筆者は可能な限り，CGの利用状況を観察しているが，近隣住民が猫の散歩で利用しているケース，やや個人的な趣味として敷地の一部を使用しているケース以外は現在まで確認できていない。逆にフェンスが設置されていないため，敷地内の花苗等を持ち去ることも可能であるが，今のところそのような行為も観察されていない。戸定CGの空間は，物理的に開かれており，ガーデン内には「戸定みんなの庭」という看板も掲示されているが，近隣住民にはこの場所が公共的空間であると十分に認識されていないと言える。その背景には，一部の住民の反対も少なからず影響している可能性もある。

しかし，従前の荒地の景観を改善し，手入れされた花で敷地を彩る行為だけでも，外部不経済の排除という点からは十分に効果がある。CGでどのようなアクティビティが行われるかだけでなく，地域の景観・環境改善という観点からも，CGの公共性を評価することは可能であろう。

③CGの場が持つコミュニティの醸成機能

戸定CGの場合，活動主体が大学生であるため常に流動的であるという特殊性と，活動に対する近隣住民からの反対により，CGの場や活動がコミュニティの紐帯を醸成するという状況に至っていない。このため，コミュニティにおける主体の形成も十分とは言えない状況にある。

この例は，CGが必ずしもコミュニティの主体性や空間の公共性を醸成しうる訳ではなく，これらを実現するためには一定の条件が整っていなければならないという重要な視点を提示している。

3-4. 雄勝ローズファクトリーガーデン

1) 位置及び周辺環境

雄勝ローズファクトリーガーデン（以下，雄勝CG）は，宮城県石巻市雄勝町味噌作地区の津波浸水エリアに位置する敷地面積約1,500㎡の大規模なCGである。東日本大震災で被災した他の地域と同様に，石巻市雄勝町も甚大な被害を受けた。図3-14は，2011年9月時点に雄勝地区中心部の様子である。このような浸水エリアは津波で海水を被っていることや，従前の土地利用が住宅地であったことなどから，CGとして再生するのは容易ではない。

雄勝CGは，当初からCGを作ろうとしていた訳ではない。地権者が被災した故人を慰める空間を作ろうとしたことがきっかけとなっている。しかし、その空間は様々な繋がりにより次第にCGに変化し、活動主体と土地の公共性が生まれていった。

図3-13. 雄勝CGの周辺環境

図3-14. 2011年9月の雄勝町味噌作地区の様子

2）CG成立の経緯

雄勝CGの成立の経緯を表3-8に示す。2011年3月の東日本大震災で石巻市雄勝町味噌作地区は壊滅的な被害を受けた。その後，2011年7月頃には味噌作エリアの大きな瓦礫は概ね撤去されて広大なオープンスペースが生まれ，2011年8月頃から，雄勝CGが位置する敷地の地権者が，自宅で亡くなった親族を弔うために花を植えはじめた。

一方，千葉大学園芸学部の学生有志と教員は，大学近隣で取り組んでいたCG活動のノウハウを活かし，被災地でCGづくりに取り組みたいと石巻市役所に申し出て，2011年7月からCG活動を石巻市雄勝地区の仮設住宅で展開していた。大学側は仮設住宅の住民たちとの交流を通じて，被災された方が，元の住宅があった浸水エリアが放置されているのが辛いと感じていることを知る。そこで浸水エリアにもCGをと考えて現地を見て回っていたところ，偶然雄勝CGの地権者に出会い，花植えの手伝いをしたいと申し出る。

2011年の間は大きな瓦礫を除去した後に残っている小さな瓦礫の撤去や，雑草の除去等で手一杯であったが，地元の造園会社の協力が得られるようになり，2012年3月に造園会社の支援により大規模な開墾が行われ，次第に本格的なガーデンに変化してゆく。2012年度にガーデンの周囲に鹿除けの柵を設置したり，用具庫やトイレ等のハードの整備も進め，2013年3月になるとガーデンの形態も明確になり，多くのボランティアがガーデンづくりに参加するようになる。

こうした経緯を経て2013年10月に雄勝CGは，雄勝ローズファクトリーガーデンとして新たなオープンを迎える。次第に変化する空間を目の当たりにした近隣住民も活動を手伝うようになり，2014年になると地権者は雄勝CGの運営のための社団法人を設立し，助成金を受けて作業用プレハブ小屋を建設する。そこでは仮設住宅の高齢者がガーデンの花を使ったしおり作り等の手仕事が可能であり，作業に関わった高齢者には社団法人から賃金を支払うなど，雄勝CGは地域経済も含めた被災地復興の拠点となりつつある。

CG活動が大きく展開し，コミュニティを活性化させる可能性を雄勝CGは提示している。

表3-8. 雄勝CGの経緯

時期	内容
2011年3月	東日本大震災
2011年7月	C大学が雄勝地区の住民が住む仮設住宅でCG活動を始める
2011年8月	Tさんが自宅敷地に亡くなった親族を弔うために花を植え始める
2011年9月	C大学の学生と教員がTさんの敷地で花植え活動を申し出る
2011年12月	敷地にC大学の学生が300個のチューリップを植える
2012年3月	「花と緑の力で3・11プロジェクトみやぎ委員会」の支援でボランティア約100人と大規模にガーデンを開墾。 「ガーデニング誌『BISES』ガーデンチャリティーにより「まよい蛾ハウス」の完成。ガーデンの周囲に柵（鹿除け）を設置。トイレの設置 以降，定期的にボランティアを受け入れ。社会人だけでなく修学旅行等のボランティア活動も受付ている。
2013年10月	ローズガーデンファクトリーガーデンのオープニングイベントの開催
2014年3月	一般社団法人雄勝花物語を設立、作業用プレハブを建設
2014年5月	遊具の設置

3）空間形態

雄勝CGの空間形態は，耕作面積も含めて変化を続けている。地権者の所有する土地が約3000㎡と広大なため，CGとして全てを耕作・管理することが労力的にも金銭的にも困難だからである。また，当初は簡単な図面により敷地の一部でガーデンの造成，施工をしていたが，ガーデンの面積が次第に拡大するなかで，2013年に図3-15に示すガーデンの詳細な設計図面を造園会社が作成する。現在の空間形態は概ねこれに沿ったものとなっている。また，雄勝CGは，地元で採れる雄勝石を花壇の土留めとして使用したり，OGATSUの文字を花で描いたり，四阿の屋根を雄勝石で葺くなど，地域アイデンティティの継承にも配慮している。

更に周囲に建物が殆どないことから，作業環境を向上させるために敷地内にトイレや日陰のある四阿を設置するなど，来訪者を前提とした空間整備が2013年に展開する。また，CGの周囲はシカ除けのために木製の柵を設けているが，これが雄勝CGの特徴になりランドマークとなっている。

図3-15. 雄勝ローズファクトリー設計図面（2013年6月）

図3-16. 雄勝CGの外側から内部を見る

4）CGの運営

前述のとおり，雄勝CGは2011年の夏頃から植栽活動が始められているが，当初はCGとして展開することは想定していなかった。CGとして大きく変化したのは2012年3月の大規模開墾であり，それ以降，雄勝CGは地域の拠点の1つとなるCGに変化してきた。このように空間が公共性を帯びてきた背景には，地権者1人では耕作・管理しきれない広さであるという規模も影響していると考えられる。このため管理の主体は地権者であるが，造園会社のサポートもあり，多くのボランティアに空間形成を支えられている。

地権者はこの活動をより公的なものとするために，2014年度に新たに雄勝CGの管理団体として社団法人を設立した。社団法人の活動目的は，CGの運営のみならず子どもの環境教育や防災教育も含んでおり，今後はそうした活動にも力を入れたいと考えている。

一方で，雄勝CGの管理に浸水しなかった同じ雄勝地区の近隣住民も関わっていることは，極めて重要な意義を有すると筆者は考える。被災地においては，一人ひとりの被災の状況や再建の意向，方法が異なっており，被災状況の異なる住民が協働で何かに取り組むことは決して容易ではない。雄勝CGは，雄勝に残り故郷の復興に取り組もうと考えている立場の異なる住民同士を繋ぎ，CGの様々な活動が対話や協働のきっかけを生み出している。

5）CGにおける主体形成及び公共性の獲得の分析

①CGを通じたコミュニティの主体性の獲得

雄勝CGの事例は，まさに空間の変化を通じてコミュニティの主体性が獲得された事例だと言える。当初，地権者はCGをつくろうという考えはなく，ごく個人的な動機により花植え活動を始めている。しかし，CGとしての空間が広がり，多様な支援者の活動により空間が質的にも充実してゆくなかで，地権者自身がCGの敷地を失われたコミュニティの紐帯を再生する場にしようという考えを持つように変化してゆく。更には雄勝CGを復興の拠点や，CG活動を復興に取り組む活動の１つとして位置づけている。

②空間の公共性

雄勝CGの敷地は本研究で示した事例の中で，唯一，個人の敷地である。しかし，そこに多くの主体が関わることで，雄勝CGは地権者自身の土地ではなく，雄勝のための土地であるという認識に変化してゆく。現在，雄勝CGは，雄勝の復興支援に全国から来るボランティアの受け入れ先にもなっており，雄勝の交流人口を支える基盤の１つである。

雄勝CGは浸水エリアに生み出された数少ない「人が見える空間」である。浸水エリアの大部分は，瓦礫の撤去後，土地利用が定まるまで，手つかずのままとなり放置されている。暫定的土地利用の手段であるCGは，こうした空間の荒廃を抑制し，そこが改めて再生される場所であることを示す効果もある。

③CGの場が持つコミュニティの醸成機能

震災後，多くの住民が他地区へ流出するなかで，雄勝CGはそこに残った住民を繋ぐ役割も果たしていた。仮設住宅に設けられた集会所等は，仮設住宅以外の住民は使いづらく，仮設住宅の集会所以外には被災地には公共的な空間は殆どない。そうした中で，CGのような屋外空間は誰にとっても入りやすく，また，そこで活動している人に対して声もかけやすい。雄勝CGは浸水エリアの土地利用の可能性を提示するとともに，復興を担う重要なプレイヤーの１つに成長しつつある。

4. 考察

以上の４つの事例を踏まえ，CGを通じたコミュニティの主体性の獲得と公共的空間の生成，CGの場が持つコミュニティの醸成機能について，以下の考察が得られた。

（1）コミュニティの主体性の獲得

①活動の「場」と「機会」により育まれる主体

コミュニティを牽引する主体を形成するためには，そのための「場」と「機会」が必要であり，CGはその双方を同時に提供しうるものとなっていた。「場」については，岡部(2012)の「手間のかかる場所がコミュニティを生み出す」[6]との指摘にもあるように，CGは手間のかかる場所であり，完成型もなく，協働作業によって維持・生成される空間であり，その成立には協働作業が不可欠である。一方，「機会」については，CGは誰もが主体的に関わることが可能である特徴を有する。そこで必要になる仕事の内容は，土運びのような力仕事，除草のような力に応じてできる作業，イベントの売り子，植物の専門知識など，実に多様である。このため，植物の知識の有無に関わらず，子どもや高齢者まで誰もが自分の役割を見つけることができる。このように，誰もが協働できる「場」と「機会」の双方の要素が同時に存在することが，コミュニティの主体を形成する契機となっていた。

②協働作業を必要とする空間規模

雄勝CGは，地権者個人の敷地であるが，そこは公共的空

間であると認識されていた。もちろん，浸水エリアなので市による買い上げの対象ということもあるが，それ以前の段階から，地権者はもはや自分たちの空間ではないと認識している。これは，敷地面積が広大で個人での耕作や維持・管理は明らかに不可能であるということも影響していると考えられる。また，宮崎CGや今宿CGも一人で管理することは到底不可能である。

一方で，戸定CGは活動頻度も1ヶ月に1回と少なく，作業も数人いれば2時間程度で終了する。これは敷地規模が小さいという物理的な要件に依存する部分が少なくない。つまり，少人数で管理ができてしまう規模の空間の場合，「協働」の必要性を活動メンバーが強く感じることができず，協働による主体形成が困難になる可能性があると考えられる。すなわち，協働の「場」と「機会」に加え，その「必要性」がコミュニティの主体性を育む一要素である。

②コミュニティの単位と活動エリアの整合性

緑化活動のようなテーマ型の活動を展開してゆくためには，地縁型のコミュニティとは異なり，主体となる組織の構成母体となるコミュニティの単位が比較的大きくなりやすい。宮崎CG・今宿CGも基盤となるコミュニティの単位は区レベルであったが，CG活動は活動の範囲が極めて限定的であるため，そうした空間を見守るコミュニティの単位は町内会レベルになる。コミュニティの主体と影響を受ける空間のスケールが異なると，摩擦も起きやすい。

一方，雄勝CGは，空間規模は大きいが基盤となるコミュニティの元々の繋がりが深く，誰が活動しているのかお互いに顔が見えている。ヒアリングにおいても，「Tさんが頑張っているから。」という言葉を何度も耳にした。

コミュニティで主体的に活動する組織を生成する場合，活動範囲と基盤となるコミュニティの範囲の整合性が主体性の獲得において重要な要件になる。

（２）公共的空間の生成

①協働作業により生じる公共性

CGは協働作業の場であり，協働作業で汗を流すことにより，その空間が皆のものという意識が生まれる。雄勝CGにおいて多数のボランティアによって形成されたガーデンは，敷地が個人のものであっても，もはや個人の敷地という認識はなく，コミュニティの拠点としてCGが運営されていた。雄勝CGでボランティア活動しているのは地元の住民以外も多数含まれるが，地元であるかどうかに関わらず，そこに関わりのある人が多いほど公共性は高まる。空間の公共性を高めるためには，より多くの住民がそこに主体的に関わることが不可欠である。

②主体の能動的取り組みによる公共性の創出

宮崎CGや今宿CGでは，朝市の開催やイベントの開催など，近隣住民がCGの空間を利用する機会を積極的に設けていた。これは，CGが公共的空間であるとCGの運用主体が認識することで生み出されていた。単にCGの維持・管理をするだけでなく，空間の公共性を生成するためには，運営主体による空間の積極的な公開や空間での多様なサービスの提供が重要視されていることが明らかになった。

（３）CGの場が生み出すコミュニティの主体性

CG活動は基本的にはテーマ型コミュニティの活動である。しかし，CGには場を基盤とする主体もそこに存在していることが確認できた。つまり，テーマ型コミュニティと地縁型コミュニティの混在がCGの担い手の特徴であると言える。CGの場は，こうしたテーマ型と地縁型のコミュニティの結節点となり，外からの人を地域に受け入れ，また，中の人を繋ぐ役割を果たしていることが把握された。

＜注＞

1) 「作られたものから作るものへ」は2013年度の重点テーマであり西田幾多郎の言葉である。
2) 2013年5月に実施した町田市公園課のヒアリングによる。
3) 2002年に公益財団都市緑化基金（現：公益財団法人都市緑化機構）が全国の緑化活動団体の調査を行っているが，CG活動だけでなく植樹や里山保全活動団体等も含まれており，全体で約5000団体にのぼっている。
4) 行政主体で公園の花壇の植え替えを住民参加で実施するものをCGと呼んでいる場合もあるが，本研究はコミュニティの醸成に焦点を当てていることから，このような行政主体のCG事業は対象としない。
5) 参考文献3)にて指摘されている。また、筆者が参加した2013年、2014年度のACGA（American Community Gardening Association）の年次大会におけるツアーで見るCGの大部分が市民農園タイプであった。
6) わが国においても一部の自治体でコミュニティ型の市民農園が運営されている事例もあるが，あくまで特殊事例である。
7) 参考文献6)など，CGに関する文献が1990年代後半から見られるようになる。
8) 図3-1, 3-6, 3-10, 3-13は国土地理院基盤地図情報（道路縁、建築物の外周線）を利用して作成。

＜参考文献＞

1) 渡部陽介他(2014)「カシニワ制度に基づくコミュニティガーデンにおける公共性の変化」，平成26年度日本造園学会全国大会研究発表論文集, No. 32, pp713-718
2) GreenTHumb(2014)"Greenthumb Hand Bkook", NYC P&R Department
3) 越川秀治(2002)「コミュニティガーデン-市民が進める緑のまちづくり-」，学芸出版社
4) 佐藤宏亮・後藤春彦・田口太郎(2007)「ニューヨーク市のコミュニティガーデンにおけるマネジメントの仕組み：コミュニティ・ランド・トラストによる地域環境管理に関する研究」，日本建築学会学術講演梗概集, F-1, pp1165-1166
5) 平田富士夫・陳小奇（2003）「サンフランシスコ市のコミュニティガーデンの実態とガーデンコーディネイターの役割」，都市計画論文集, No. 38-3, pp751-756
6) 延道安弘（1997）「子どもコスモロジーまちづくり一学校近隣公園のコミュニティガーデン化」，都市問題研究, No. 49(7), pp3-23
7) 倉阪秀史編・岡部明子他著(2012)「人口減少・環境制約下で持続するコミュニティづくり」千葉学ブックレット，千葉日報社

＜研究協力者＞

山田　佑香　　住友林業緑化（株）